

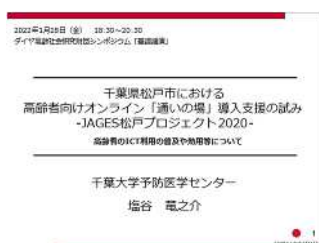
1. オンラインシンポジウム「私たちと親世代の生活をICTで豊かに～ニューノーマル時代のコミュニケーション～」を開催

ダイヤ財団は、日本の高齢者にとってのICTの役割とその可能性について、実際の取り組みやアイデアを交換することを通じて問題提起をするためのオンラインシンポジウムを、1月28日から2月10日に配信しました。ダイヤ財団常務理事 佐藤一三の開会挨拶に続き、6名の方にご登壇いただきました。以下、シンポジウムの概要を登壇順に紹介します。（所属・肩書は1月28日時点）

【第1部】基調講演

「高齢者のICT利用の普及や効用等について」

千葉大学 予防医学センター 特任研究員 塩谷竜之介氏



千葉県松戸市の都市型介護予防モデル「松戸プロジェクト」の概要に続き、松戸市で行った高齢者向けオンライン「通いの場」導入支援の取り組み等をもとに、高齢者のICT利用の普及や効用等について、ご講演いただきました。

- ・「松戸プロジェクト」の特徴の1つとして、プロボノ型のボランティアをはじめとする都市部ならではの多様な部門が協働して、住民主体の地域活動を間接支援することが挙げられる。
- ・「通いの場」への参加数は、「松戸プロジェクト」開始後に約3倍に増えた。
- ・参加している高齢者を3年間追跡調査したところ、社会参加している高齢者は、社会参加していない高齢者と比べ、フレイル(要介護の一手手前の状態)となるリスクが低いことが分かった。よって、社会参加を継続することも社会参加することと同様に重要と考える。
- ・2020年に「松戸プロジェクト」の第2期が始まるや否や、新型コロナウイルス感染症の大流行が起き、活動状況を調査の結果、第1回の緊急事態宣言中に7割以上が活動休止となり、宣言解除後に活動を再開したのは半分未満に留まっていた。そこで松戸市では、大学、自治体、事業者、住民ボランティアが協働し、2020年11月から無料体験講習会にて、「通いの場」の導入支援を行った。
- ・導入支援では、タブレットの操作に慣れていない方を想定し、タブレットの無料貸し出しや、遠隔操作支援の体制も準備し、マニュアルをはじめとする必要データは全て事前にセットアップした。
- ・「通いの場」の参加者は、一般的にICTが苦手な人が多い女性が約8割、後期高齢者が約6割を占めていたが、この導入支援によって、講習会終了直後には、「助けがあれば」も含めると、「タブレットを使える」と回答した人が約9割に達するなど、多数の人のオンライン参加が可能となった。
- ・また、約6割の方から「オンラインでの『通いの場』を続けたい」との回答があり、導入を支援した25団体の講習会終了後の活動の継続・準備状況を聴取した結果、25団体中10団体（全体の約4割）が、終了後もオンラインでのグループ活動を継続していた。
- ・「松戸プロジェクト」は「令和3年版厚生労働白書」で紹介された他、国際的にも「アジア健康長寿イノベーション賞：2021新型コロナウイルス対応特別賞」を受賞する等、高齢化がより深刻になる都市部において多様なステークホルダーが協働し、高齢者の社会的孤立を解消するという地域課題に効果

Ⅲ 研究・活動トピックス

的に取り組む先駆的事例であり、かつコロナ禍において時宜を得ている点を評価いただいた。

- ・「高齢者が通信機器を利用しない理由」についての内閣府の調査では、「使い方が分からなくて面倒」と「教えてくれる人がいない」を合わせると約6割を占めている。2021年度からは支援の期間を、3週間から6～7週間程度に延長する等、オンライン操作に不慣れな高齢者のフォローアップを強化している。
- ・今後は、活動の支援に加えて、介護予防効果の検証も実施する等、引き続き多部門が協働して先駆的な活動支援のモデル開発と支援の効果についての評価を行い、情報発信していく。

【第2部】パネルディスカッション

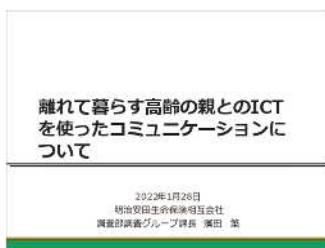
●パネリスト（登壇順）

| | |
|----------------|--------------|
| 明治安田生命保険相互会社 | 濱田 築氏 |
| なかの生涯学習大学 | 片山嗣規氏、橋本みどり氏 |
| 東京都三鷹市井の頭一丁目町会 | 竹上恭子氏 |

●コーディネーター

| | |
|-------------|------|
| ダイヤ高齢社会研究財団 | 澤岡詩野 |
|-------------|------|

■濱田 築氏



現役会社員として、遠方で1人暮らしのお母様とのコミュニケーションやサポートの様子についてお話しいただきました。

- ・2002年に現在の明治安田生命保険に入社。妻と9歳と6歳の男の子2人の4人で東京都内に在住している。私の母は夫と10年ほど前に死別し、福岡県に1人暮らしの70代前半の団塊世代である。車で数分の距離に娘（私の妹）が住んでおり、こまめに会っている。
- ・一方、私は東京在住で、帰省にはかなり時間がかかるため、コロナ禍以前に実際に会う頻度は2～3年に1回程度であり、母とのコミュニケーションはメールやテレビ通話を中心となっている。
- ・母のスマホデビュー後は、画像が大きく、見やすくなったため、写真や動画データをメールで送信するようになった。
- ・母は、当初テレビ通話を使うことはできなかったが、近くに住む妹に加え、私からもサポートの結果、使いこなせるようになった。私の子どもの運動会等イベントの写真や動画のメールへの添付に加えて、誕生日・正月・母の日等の記念日には、顔を見ながらのコミュニケーションの機会を確保するよう心がけている。
- ・テレビ通話は、離れて暮らしていても、手軽に顔を見ながら会話することができる点が非常に便利であり、母はよく「目の前で喋っているみたいだね！」と話しており、実際に会いに行けないことをそれほど苦にしていないようである。
- ・離れて暮らす母とのICTを使ったコミュニケーションの主な動機は、やはり「孫の顔を見たい！見

せたい！」ということに尽きる。

- ・ 今後は、写真データを保管でき、時間が経った後でも再度見返すことができるようなクラウドサービスを活用したり、母・妹・私の3者でのグループLINEを活用したりすることを検討しているが、加えて他のパネリストのお話も勉強して、ICTの活用にさらに取り組んでまいりたい。

■片山嗣規氏、橋本みどり氏



「いつもの仲間同士が支え合い、教え合えれば、使えるようになるかもしれない」という視点でオンラインの普及に取り組んでおられる「なかの生涯学習大学」のチームICTの活動全般について片山様から、さらにコロナ禍でのご自身の入院の経験を踏まえた体験談を橋本様にお話いただきました。

- ・ 2020年度にコロナの影響で当大学のプログラムの縮小を余儀なくされる中で、当大学の事務局より、オンライン講義導入の提案があった。導入のためには、オンライン受講できない方のサポートが必要であったが、事務局だけでは対応しきれないため、サポートのためのボランティアチームを作ることになり、17名で当チームの活動をスタートした。
- ・ 「応援します！広がる繋がる仲間作り」をキャッチフレーズに掲げ、オンライン講義の企画や運営に加え、LINEやZoomの利用支援も「シニアからシニアへの」サポートとして実施した。
- ・ チームメンバーのほとんどはICTの素人であり、サポートされる側以上にICTを勉強しなくてはならなかったが、受講生同士で「共に学び、共に育つ」ことを目指し、マンツーマンで、習熟度合いも考慮しながらサポートする等、ICTが分からない人の立場に立った活動ができたと考える。
- ・ 活動を通して分かたり、感じたりしたこと
 - ① シニアがオンラインを使うメリットと課題

メリットとしては、リアルな繋がりオンラインでの繋がり加えることで、昔からの仲間との繋がりを強め、かつ新たな人間関係も広げやすくなるし、何歳になっても学びを継続できる。さらに1人暮らしのシニアの方の見守りにもなる。一方、コンピュータウイルスやオンライン詐欺被害の防止や解決が課題であり、そのためには気軽に相談しあえる仲間の存在が大切である。
 - ② シニアがシニアをサポートするメリットと課題

メリットは、「感謝される」とか「人のためになっている」という満足感や「自分自身のスキルの向上」という手応えが得られ、かつ同世代の仲間ができる点である。一方、課題としては、ICTに詳しいシニアがまだまだ不足していることや、「自分にはできない」と諦めていたり、ICTの利用に対して自身あるいは家族が拒否感を持っていたりする方も結構おられ、お声がけしてもなかなか相談会に参加いただけないケースがある。
 - ③ 身近な仲間がサポートするメリット

お子さんに聞いても「全部操作してポイっと渡されるので覚えられない」という方も多かったので、「できるまで、一緒にサポートしてくれる仲間」の存在が大切となる。
- ・ シニアがスマホを購入する際は、必要以上に高額なプランや使い方が難しい機種を勧められることもあるので、どなたかが同行し、サポートいただくのが望ましい。親のオンラインの活用のためには、

Ⅲ 研究・活動トピックス

とにかく使う回数を増やし、日常生活の一部にしてしまうことが重要なので、たとえば LINE での文字、音声、画像や動画の送受信の面白さを、まず実感していただくのが良いと考える。



- ・自転車の衝突事故で骨折し、手術と治療のためにコロナ禍で 70 日間入院した経験について、お話しさせていただく。
- ・コロナ禍であったため、面会ができず、患者同士の会話も禁止、加えて病院のスタッフも超激務なので、十分なコミュニケーションが取れなかった。でも私には心強いチームの仲間がいて、入院先でのレンタル Wi-fi の手続き等もしてくれたので、当大学の講義やチームの会議にもオンラインで参加できた。もし ICT を利用できなかつたら、70 日間の長期入院には耐えられなかつたと感じている。
- ・コミュニケーションが取れないために認知症が進行し、退院時には家族の顔も分からなくなってしまう方も目の当たりにする一方、ある 95 歳の患者が、なんとスマホで文字や動画も交えて家族とコンタクトをとっておられた。どうやってできるようになったかを尋ねてみたところ、「そんなの簡単よ！楽しいし、これをやったらもう本当に助かるし…」とのこと。
- ・私も、病室から富士山や新宿の摩天楼を眺め、それをスマホで撮影して家族や友人に送ったりした。ICT は本当に「命の武器」であり、やっぱり必要だなと、つくづく感じさせられた入院体験であった。
- ・オンライン受講のための相談会の参加者の中には、Zoom の主催者になりたいとか、動画の編集をしたいとか、どんどん高いレベルに挑戦されている方もいる。一方、当大学の約 3 割の方は、ICT から遠ざかったままの状態にあるため、これからも 1 人でも多くのシニアがオンラインを活用し、豊かに生きることができるよう、当チームの活動を継続してゆきたい。

■竹上恭子氏



「シニアこそオンラインで交流を！」と思うようになった経緯や活動内容を、町会活動を中心にお話しいただきました。

- ・井の頭一丁目町会は東京都三鷹市の東の端にあり、低層マンションや新築戸建てが増え、それに伴い、単身者や若いファミリーが増加傾向にある。
- ・町会活動の目的のひとつとして「やりたい人を応援する」に力を入れていたが、その矢先にコロナ感染が拡大してしまった。こういう時にこそ、「地域の繋がりを感じてもらえるよう、町会でできることをやっぺいこう！」と、3密を避けた青空イベントを企画していたが、感染が更に拡大し、東京都の外出自粛要請に至ったため、住民のステイホームを応援するために、3つのことを実施した。
- ・1つ目は「電話でおしゃべりプロジェクト」。高齢の 1 人住まいの方、小さなお子さんがいるママや留守番をしている小学生の子どもたち等に電話でおしゃべりをする企画。2つ目は、「ミニトマト 100 鉢プレゼント」。3つ目は、町会活動を発信している Facebook の「カバー写真コンテスト」。
- ・コロナ禍で三鷹市内での地域活動もオンライン化が進み、私もオンラインでの活動に参加するにつれ、「シニアでもオンラインで交流はできる！」と感じるようになった。

- ・そこで、地域の若手の方や大学生にも手伝ってもらい、一昨年の8～9月にかけてZoomとLINEのビデオ通話の勉強会を開催した。続いて「介護」や「食品ロス削減」等のテーマでZoomでの講演会を開催した。さらに週1回の「Zoomでおしゃべりクラブ」も始め、現在まで1年3ヵ月継続している。
- ・三鷹市も「地域活動にZoomを！」と考え、市内7ヵ所のコミュニティセンターでZoom講座を開催し、私も井の頭地区のコーディネーターをさせていただいた。さらに講座終了後も、「井の頭おさらい会」という会を立ち上げた。当会では、行政関連の方、地元の国際基督教大学の学生、各分野の達人や団体など様々な方から色々なお話をいただいている。
- ・LINEやスマホは、「やっぱり使えるようにならないといけないな」と感じており、「息子が買ってくれたのだが、使い方がよくわからない」というような方を何とか支援したいと考えている。
- ・コロナの流行が始まった頃に、施設にいる95歳の私の母にLINEのビデオ通話を教え、なんとか使えるようになったおかげで、コロナ禍で全く会えなくなっても、毎日顔を見ておしゃべりができた。正月には、母と同じ施設にいる父も一緒に、子ども、孫、ひ孫をZoomで結ぶということもやった。父は耳が遠く、みんなの音がよく聞こえないのだが、「UDトーク」というツールで字幕も出るように設定したので、父もみんなの話が理解できたと思う。
- ・私は「シニアこそオンラインで交流を！」が本当に必要だと思っており、いろいろな地域の方とZoomでの交流ができるといいと考えている。井の頭一丁目町会と交流したい方は、当町会のメールアドレスまたはFacebookに是非ご連絡をいただきたい。

■各登壇者の発表に対する感想等



最後に各登壇者のお話への感想やアドバイスをお伺いしました。コメントの一部は、以下の通りです。

- ・ビジネスシーンだけではなく、多くの高齢の方が地域活動の中でもZoomを使いこなされていることが、新たな気づきであった。（濱田氏）
- ・基調講演の「松戸プロジェクト」の今後の活動の継続見通しや期待できる成果などについて、もっと知りたいなと感じた。（片山氏）
- ・シニア代表としてお願いしたい。「若い世代の方々へ、お願いします。分かるまで、使えるまで、教えてください！ボケる前」（橋本氏）
- ・現役世代の方が、お仕事を続けながら親御さんのサポートを自分なりに整えることは重要だと思う。離れた親御さんのご近所の方や地域包括支援センターの方とも連携を取っておき、何かあった時には、すぐ相談できるようにしておくなど、今やれることを考え、実践して欲しい。（竹上氏）

本シンポジウムが、シニアをはじめとする皆さまの身近な方の日常を知り、ICTでいかに生活を豊かにしていくかを、一緒に考えていくきっかけになれば幸いです。

財団主催シンポジウム・セミナー <https://dia.or.jp/disperse/event/>



リンクしない場合は財団のトップページからアクセスしてください

2. 50代・60代を対象に老後資金準備等に関する調査を実施

2021年11月、全国の50～69歳の男女5,150名を対象に、老後資金等に関する意識調査を実施しました。

当財団では2019年2月にも老後資金等に関する調査を実施しており、前回と同一の質問を一部設けることにより、経年変化も観察しています。

- 調査期間： 2021年11月22日～24日
- 調査方法： インターネット
- 調査対象：

| | | |
|----------------------------|--------|-----------|
| ① 定年制のある民間企業の正社員男女（50～64歳） | 2,678名 | |
| ② 定年を経験後、現在就労中の男女（60～69歳） | 1,236名 | |
| ③ 定年を経験後、現在無職の男女（60～69歳） | 1,236名 | 総計 5,150名 |

【主な調査項目】



【調査結果（一部）】

50代男女、60代前半女性の半数近くが、65歳時の老後資金が必要額に満たないと予想

金融審議会市場ワーキング・グループが2019年に出した報告書をきっかけに、65歳からの30年間で金融資産を2,000万円取り崩す必要があるという、いわゆる「2,000万円問題」が大きな話題となりました。それから2年強経過した今回、現役正社員の意識を確認しました。

65歳時に「保有が必要だと思う資金額」（必要額）の平均は、男性は50代が2,930万円、60代前半は3,222万円、女性は50代が2,832万円、60代前半は2,537万円。「2,000万円以上2,500万円未満」が最多で、「2,000万円」を意識する傾向が垣間見える結果となりました。（図1①）

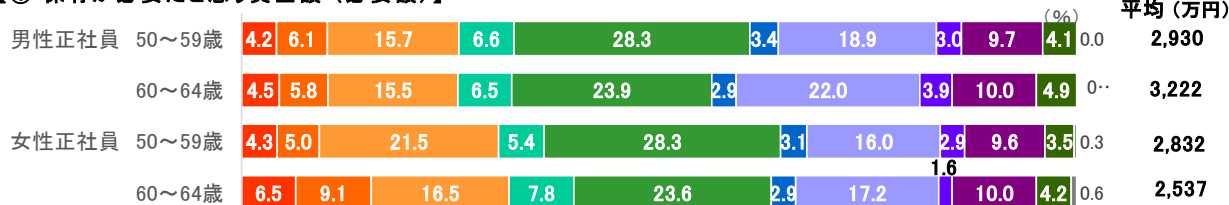
一方、65歳時に「保有していると思う資金額」（予想額）の平均は、男性は50代が3,131万円、60代前半は4,639万円、女性は50代が2,649万円、60代前半は2,664万円。男性と60代前半の女性は予想額の平均が必要額の平均を上回ったのに対し、50代の女性は届きませんでした。（図1②）

予想額と必要額を比較すると、どの層も「過不足なし～プラス500万円未満」すなわち“必要額は確保できそう”と予想する人が3割強を占めました。一方、予想額が必要額に満たないと考える人も女性と50代男性

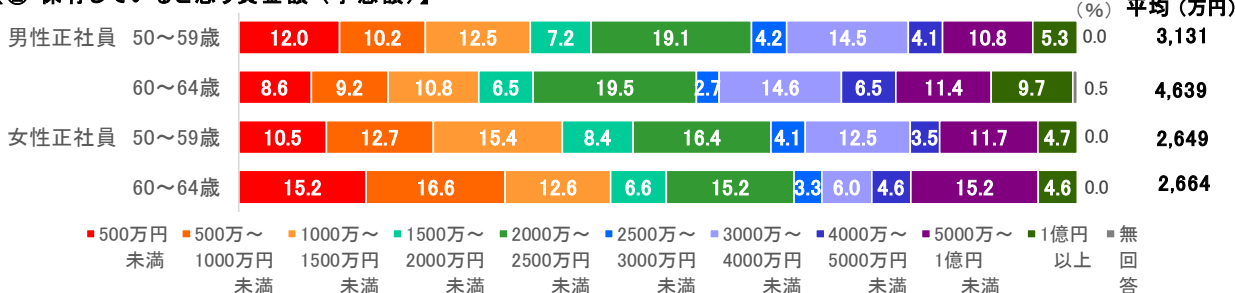
では5割近くを占めています。「予想額-必要額」の平均は、男性は50代がプラス83万円、60代前半がプラス1,422万円。女性は50代がマイナス466万円、60代前半がマイナス157万円。60代前半の男性の一部が平均を押し上げる様子が見られました。(図1③)

図1 65歳時の老後生活資金額

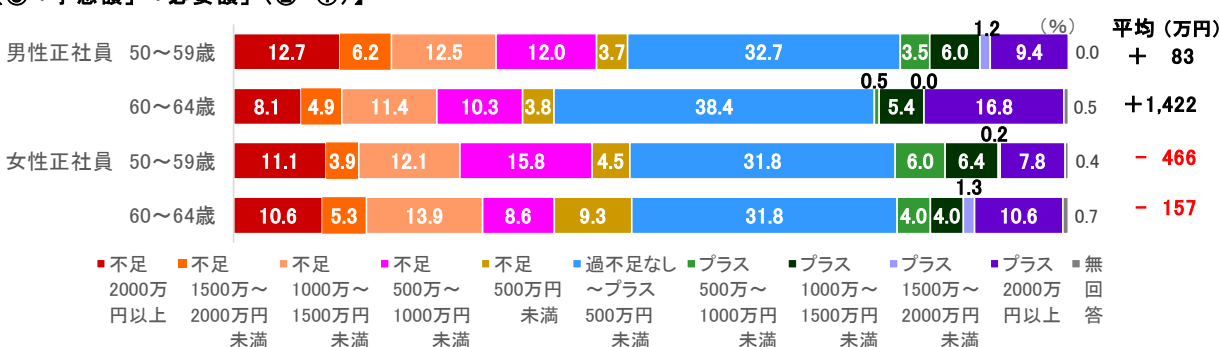
【① 保有が必要だと思う資金額(必要額)】



【② 保有していると思う資金額(予想額)】



【③ 「予想額」-「必要額」(②-①)】



50代正社員男性の1/4、女性の1/3が「iDeCo」「つみたてNISA」の制度内容が「わからない」

税制優遇のある資金積立て制度に対する意識を確認しました。「老後のための資産形成において、あなたにとって有効だと思いますか」との質問に対し、「iDeCo」を“有効”(「とても有効」「やや有効」と回答した割合は、50代前半は男性43.2%(前回35.0%)、女性36.1%(同25.3%)と、男女とも前回調査を大きく上回りました。一方、50代後半は、女性は27.9%(前回23.4%)と前回は上回ったものの、男性は31.5%(同33.7%)にとどまりました。「制度の内容が分からない」と回答した割合は、女性が50代前半34.5%(前回37.8%)、同後半36.6%(同40.2%)と前回より低下したのに対し、男性は50代前半が27.4%(前回26.2%)、同後半29.6%(同29.1%)と、女性より低いものの、前回とほぼ変わりませんでした。

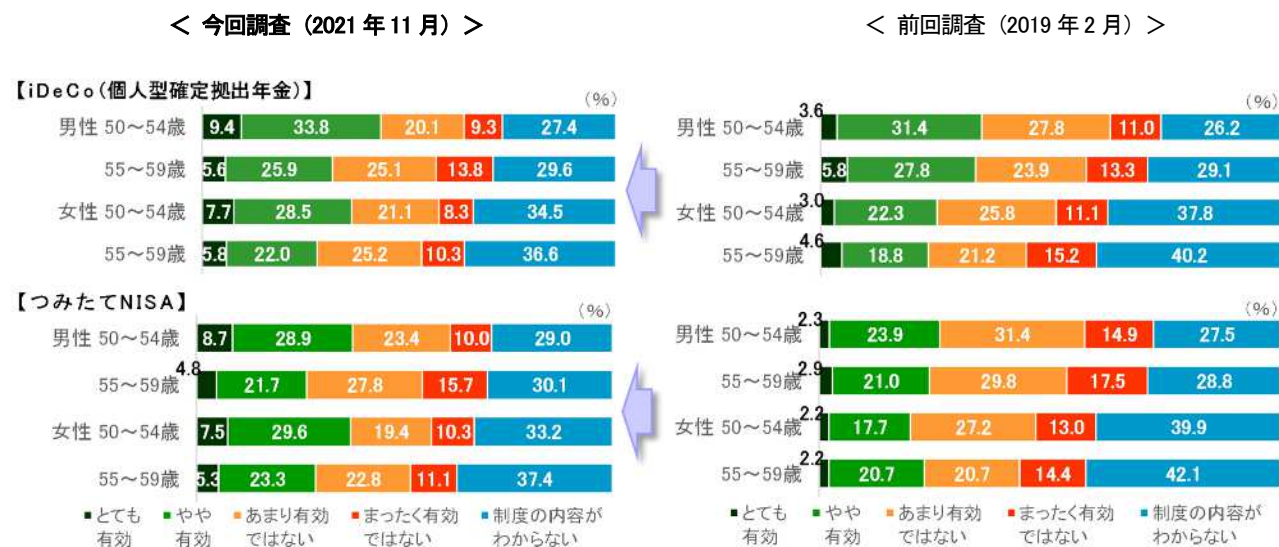
「iDeCo」は、企業年金加入者が加入可能となったのは2017年1月と、会社員にとっては比較的新しい制度です。また、今回の調査時点では加入可能年齢は60歳未満でした(今年5月に65歳未満まで拡大)。税制面の優遇が大きい制度だけに、加入可能年齢拡大を機に、一層の周知が必要ではないでしょうか。

2018年1月開始とより歴史の浅い「つみたてNISA」を“有効”と回答した割合は、50代前・後半とも男女

Ⅲ 研究・活動トピックス

に差はなく、50代後半になると前半より10ポイント前後ダウンしています。「制度の内容が分からない」割合の前回からの変化の様子には、iDeCo とほぼ同様の傾向が見られました。

図2 老後資産形成における各制度の自身にとっての有効度



「想定寿命」は男性80.3年、女性80.8年。女性は平均寿命より7年も短い

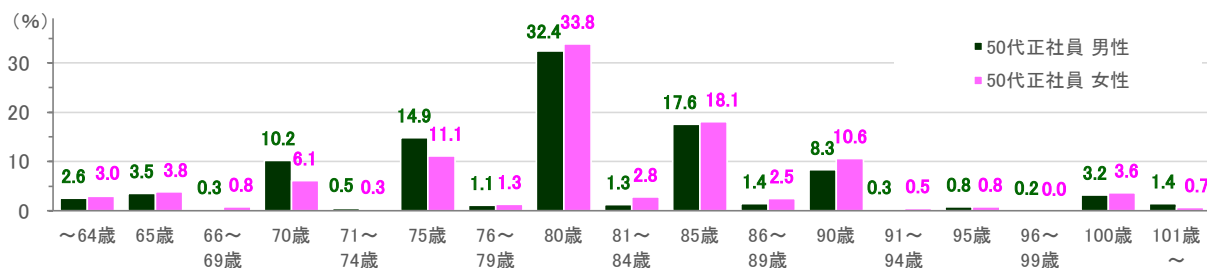
当財団では、一人ひとりが「想定寿命」(人生設計として考えている自身の寿命。当財団の造語)を設定し、それを前提にライフプランを立てたり、老後資金を準備したりすることを提唱しています。

50代正社員に自身の「想定寿命」を尋ねたところ、具体的な年齢を回答した人の平均は、男性が80.3年、女性は80.8年で、男女とも3人に1人が「80歳」と回答しています。

2020年の平均寿命(0歳の平均余命)は男性が81.64年、女性87.74年です。男性の多くが平均寿命を意識して回答したことが想像される一方、女性は平均寿命を7年も下回っています。さらに、65歳の平均余命は男性が20.05年、女性は24.91年ですから、65歳の人は平均で男性は85.05歳、女性は89.91歳まで生きることになります。しかもこれはあくまでも平均です。生存する確率に着目すると、90歳は男性28.4%、女性52.5%、100歳の生存率も男性は2.3%ですが、女性は8.5%です(「令和2年簡易生命表」の「生存数」から計算)。

人生100年時代に80歳までの想定では資金不足が懸念されます。長生きの可能性を正しく認識し、それを踏まえた経済準備をすることが重要ではないでしょうか。

図3 「想定寿命」の分布



50代正社員の約3割が公的年金の繰下げ受給を希望

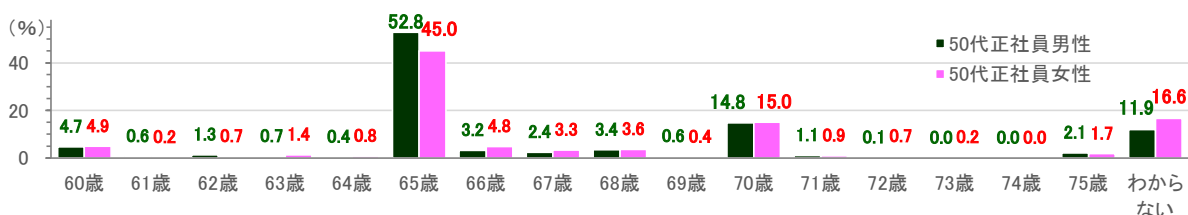
公的年金(老齢厚生年金等)の繰下げ受給可能年齢拡大(75歳まで)を踏まえ、受給開始を希望する年齢を尋ねたところ、50代正社員のほぼ半数(男性52.8%、女性45.0%)が本来年齢の「65歳」と回答しました。

繰上げ受給（60～64歳）は、2022年4月に軽減された減額率（繰上げ1ヵ月あたり0.5%減→0.4%減）を示して質問しましたが、希望者は男性が7.6%、女性は7.9%にとどまりました。

一方、繰下げ受給（66～75歳）は男性が27.7%、女性は30.5%と、50代正社員の約3割を占めました。繰下げ希望年齢の最多は「70歳」（男性14.8%、女性15.0%）で、今年4月に拡大された範囲（71～75歳）を希望する人は、男性は3.3%、女性は3.5%にとどまっています。

2020年度の老齢厚生年金の繰下げ受給率は1.6%でした（厚生労働省「令和2年度厚生年金保険・国民年金事業の概況」）。ただし、この率には老齢基礎年金だけを繰り下げた人は含まれません。老齢厚生年金の受給開始まで加給年金が支給されない等のデメリットを避けるために、老齢基礎年金だけを繰り下げるケースも想定されますが、潜在的な繰下げ受給希望者が3割程度いるとは言えそうです。

図4 公的年金の受給開始希望年齢



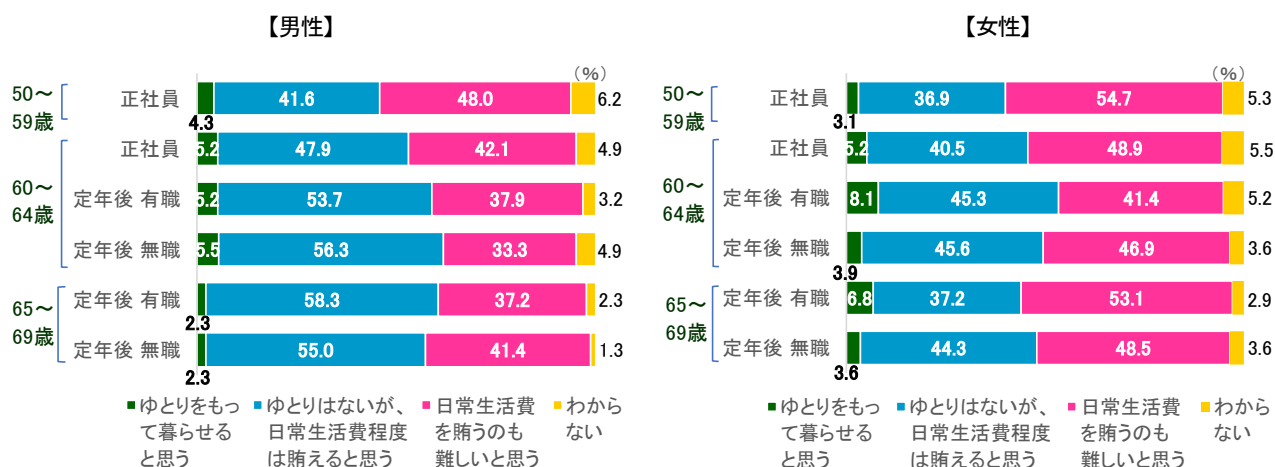
50代正社員の約半数が「厚生年金だけでは日常生活を賄うのも難しい」と予想

「仮にあなたの収入が公的年金だけだったら、暮らし向きはどうだと思いますか。現役の方は引退後の生活を想定し、既に引退されている方は現在の生活をもとにお考えください」と質問しました。

50代正社員は、男性の48.0%、女性の54.7%が「日常生活を賄うのも難しい」と回答しました。

一方、年金受給世代である60代後半の男性は、約6割（有職者60.5%、無職者57.3%）が「賄える」（「ゆとりをもって暮らせる」「ゆとりはないが日常生活費程度は賄える」と答えています。60代後半でも「賄うのも難しい」とする割合が男性は約4割、女性は約5割を占めており、現役世代と年金受給世代では想定する生活水準にも違いがあると考えられるため、単純比較はできませんが、現役世代のほうが公的年金（厚生年金）の水準に対し、悲観的な見方をしている人がやや多い結果が見られました。

図5 公的年金のみと仮定した場合の暮らし向き



全質問の回答を掲載した「50代・60代の老後資金等に関する調査報告書」を当財団のホームページで公開しています。

(<https://dia.or.jp/disperse/questionnaire/>)



3. 機関誌「Dia News」で情報発信

大学等の教育機関、医療・福祉・高齢関係の諸団体、福祉関係施設、官公庁・自治体、三菱グループ各社の皆さん、三菱グループ各社のOB・OG、ダイヤビックのインストラクター等を対象に年3号無償で発行しています。毎号の発行部数は約2,000部です。(肩書は発行当時)



No.104 (2021年6月25日発行)

巻頭言 **あなたの人生の質は高いですか**

公益財団法人さわやか福祉財団 会長 堀田 力

Dia Report **高齢者の社会的活動の意義と効用
～「DAA」の社会的活動の支援にあたって～**

公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団 企画調査部 次長 佐藤 博志

フォーカス高齢社会 **社会参加による介護予防の可能性**

城西国際大学 福祉総合学部理学療法学科 助教 安齋 沙保里

No.105 (2021年10月26日発行)

巻頭言 **事業継続**

一般財団法人長寿社会開発センター 理事長 高井 康行

Dia Report **コロナ禍における高齢者のコミュニケーションの変化
—インターネット利用に着目して—**

ダイヤ高齢社会研究財団 研究部 主任研究員 澤岡 詩野

フォーカス高齢社会 **ダイヤビックと私
—シニアがシニアを指導するエアロビクス—**

ダイヤビックひばり会 会長 佐藤 邦彦

財団研究紹介 **シルバー人材センターにおける重篤事故の発生状況と要因
—10年間の重篤事故報告資料の分析を通じて—**

ダイヤ高齢社会研究財団 研究部 研究員 森下 久美

Dia Column **想定寿命を大きく超える人生**

ダイヤ高齢社会研究財団 企画調査部長 森 義博



No.106 (2022年2月25日発行)

巻頭言 **コロナ禍の下での介護サービス相談**

介護サービス相談・地域づくり連絡会 代表
特定非営利活動法人地域共生政策自治体連携機構代表理事・事務局長 石井 信芳

Dia Report **実証研究からアクションリサーチへ
—シルバー人材センターの生きがい就業に着目した研究の軌跡と展望—**

ダイヤ高齢社会研究財団 研究部 研究員 上原 桃美

フォーカス高齢社会 **大学生による新しい高齢者サロンの在り方
—『With コロナオンライン高齢者サロン』開講を通して**

城西国際大学看護学部 高齢者看護学領域 教授 井上 映子

財団研究紹介 **『ストップ介護離職』ダイヤ財団が重ねてきたメッセージ**

ダイヤ高齢社会研究財団 企画調査部長 森 義博



以上のほか毎号、財団のニュース「Dia Information」を掲載しました。

4. ホームページで幅広い情報を発信

当財団ではホームページに研究・活動実績を掲載するだけでなく、以下の項目についても閲覧することができます。一般のみなさま、研究者のみなさま、企業のみなさまに広く情報を発信しています。

- ・社会老年学データベース「*DiaL*」
- ・シニアが楽しめるエアロビック「ダイヤビック」
- ・うつ予防プログラム「ハッピープログラム」

その他サイトリンク：介護の総合情報サイト「MY 介護の広場」
 元気高齢者の活動グループ「ダイヤネット」
 かながわ子ども教室

以下の URL を参照ください。

<https://dia.or.jp>

公益財団法人
ダイヤ財団 **ダイヤ高齢社会研究財団**
 The Dia Foundation for Research on Ageing Societies.

サイトマップ アクセスマップ サイト内検索

ダイヤ財団について 研究・調査・システム開発 意識啓発・活動成果の普及

『しあわせで活力ある長寿社会』
 の実現に向けて

ダイヤ財団
 The Dia Foundation for Research on Ageing Societies

一般のみなさまへ 研究者のみなさまへ 企業のみなさまへ

研究カテゴリー 医療・介護 社会参加・就労 健康づくり ライフプラン